平成１０年度　第１回総合目録データベース実務研修

電子ジャーナルの所蔵登録と相互利用について

九州大学附属図書館
江藤　弘史

１．はじめに

インターネットの普及に伴い、ここ数年各出版社がインターネットを介して雑誌を提供している。日常業務の中でこうしたデータだけの雑誌をどの様に契約したらよいのか。また、購読を始めた場合に、それは図書館の相互利用に供することが可能なのか。この様な疑問から今回のテーマは始まった。

本稿では、出版社毎に異なる電子ジャーナルの提供方法から始めて所蔵登録、さらに相互利用について考える。

２．電子ジャーナルとは

2.1 電子ジャーナルの定義

電子ジャーナル、オンラインジャーナル、Electric Journal 等々その呼称については様々である。また、ネットワークを通じて情報発信される内容も、個人の主張をホームページ上で公開したものからプレプリント、学術雑誌等様々である。

ここでは、出版社から提供される学術雑誌に絞ってその検討を行うものとし、その名称については、「電子ジャーナル」とする。

2.2 電子ジャーナルの提供方式

電子ジャーナルは、e-mail, FTP, Gopher 等様々な形態で提供されているが、WWWによるものが現在のところ多い様である。そのファイルフォーマットとしては、ＰＤＦ形式またはＨＴＭＬ形式により提供されるものが多い。ＰＤＦ（Portable Document Format）形式は、印刷イメージに近い形で表現することが出来る形式で、WWW ブラウザに加え Adobe 社から無料で提供される Acrobat Reader がヘルパーソフトとして必要となる。ＨＴＭＬ（HyperText Markup Language）形式は、ホームページを記述する言語であるが、数式等の特殊記号や図表を表現するには限界がある。

2.3 電子ジャーナルの特徴

電子ジャーナルの特徴としては下記の点が挙げられる。

①速報性

冊子体の雑誌と異なり、印刷及び郵送の行程が省かれるため、タイムラグが大幅に省かれる。タイトルによっては冊子体発行前にコンテンツやアブストラクトが提供されるものもある。

②検索機能

データがデジタル化されているため、求める情報を容易に探し出すことができる。ただしその機能は、出版社の提供するものに依存するため、タイトルにより異なる。

③納品がない

出版社のサーバ又はローカルサーバ上でデータが更新されることにより最新の情報が提供される。これにより欠号の不安からは解放される。また、冊子体の雑誌の様に受付の作業が不要（不可能）となる。この件については、契約上重要な意味を持つので、別途検討する。

2.4 電子ジャーナルの短所

2.3 では電子ジャーナルの長所について述べてみたが、以下に挙げるような短所も持ち合わせている。

①ネットワークの問題

インターネットを介して提供されるという性質上、ネットワークのトラフィックに左右されることは避けられない。時間帯によってはなかなかサーバ接続できない、また接続できてもデータ転送に時間がかかるという事態も起こりうる。

②購読を中止した場合

冊子体の場合は購読を中止してもバックナンバーは手元に残る。しかし、電子ジャーナルの場合、中止した場合に契約が終了した時点でデータの提供が終了する。

2.5 電子ジャーナルの購読方法について

電子ジャーナルの購読方法については、出版社により様々となっている。その種類について下記の通り分類し、整理してみる。

- 電子ジャーナル
  - 無料
    - ①無料公開
    - ②冊子体購読者に対して無料で提供
  - 有料
    - ③タイトル毎の購読が可能なもの
    - ④冊子体購読者に対して有料で提供
    - ⑤出版社が提供するもの全てを購読する
    - ⑥One-stop shopping

①無料公開

文字どおり電子ジャーナルが無料で公開されるものである。現在、無料で公開されているものも多少存在するようである。

②冊子体購読者に対して無料で提供

Springer-Verlag 社や AIP（アメリカ物理学会）等が行っているサービスで、冊子体購入者にはその対応する電子ジャーナルを無料で提供するものである。ただし、現在は無料でも将来的には有料化するものもあると思われる。

③タイトル毎の購読が可能なもの

AMS(American Mathematical Society) や ACS(American Chemical Society)等では電子ジャーナル単体で各タイトル毎の購読が可能である。

④冊子体購読者に対して有料で提供

Elsevier Science 社は、その機関が購入している冊子体タイトルと連動した年間購読価格（冊子体価格の１５％）を支払えば電子ジャーナルを提供する EES(Elsevier Electronic subscription)というサービスを行っている。

⑤出版社が提供するもの全てを購入する

Academic Press 社は、コンソーシアム契約を前提として、その発行する全ての電子ジャーナルを提供する。契約金額は、参加機関が購入している同社発行の雑誌を全て継続したものとして算出した総価に定数を乗じて算出する。この定数は、現在のところ１１０％の様である。また、購入タイトル数に応じて割引制度もある。また、併せて冊子体を購入する場合は、冊子体価格の２５％で購入できる。

⑥One-stop Shopping

Swets & Zeitlinger 社が提供する SwetsNet や Ovid 社が提供する journals@ovidといったところに代表される出版社に関係なく電子ジャーナルを提供するものである。こうした取り組みは、ユーザーインターフェイスの統一及び契約方法の統一を実現する。しかし、その中にどれだけ購入希望のある雑誌を含むことができるかが成否の鍵となろう。

2.6 ユーザー認証方法について

電子ジャーナルでは、一般的にログイン名とパスワード又は IP アドレスによりユーザーの認証を行っている様である。それぞれの方法について検討してみたい。

①ログイン名とパスワードによる認証

ログイン名とパスワードによる場合、その管理が重要となる。それを知っている者は何処からでもアクセスができるという長所がある反面、パスワードが漏れてしまった場合には、誰でもアクセスができるという短所もある。購読契約を行った後、購入機関所属の利用者への周知の方法については、工夫が必要となろう。

②IP アドレスによる認証

IP アドレスによると前述した様な図書館側の管理という問題は無くなる。しかし、事前に登録した IP アドレス以外のコンピュータからは雑誌を読むことができない。複数のキャンパスを持つ大学では１つの組織としての契約ができない可能性がある。

2.7 電子ジャーナルの契約について

2.3 ③でも述べたが、電子ジャーナルでは、冊子体の雑誌の様に検収することができない。これは、購読するうえで電子ジャーナルと冊子体の雑誌との重要な相違点といえる。現行の雑誌契約においては、物品の到着状況に応じて支払をする。（前金払いの場合は、契約締結後に一定割合の金額を支払うが、清算の際にその到着状況に応じた金額で契約の改定を行うので同様と考える。）

検収のできない電子ジャーナルは、現行の物品供給契約の範疇には納めることがで

きない。電子ジャーナルの契約を行う場合は、あくまでアクセス権を提供する契約ととらえるべきではないかと思われる。また、Academic Press 社の様にコンソーシアムでの契約を行う場合、参加機関は全て同様のサービスを受けるが、契約金額の割り振りをどの様にするのかは重要な問題となろう。

３．電子ジャーナルの相互利用について

通常図書館間では、ＩＬＬ等で文献複写依頼があった場合、特に支障がない場合は複写サービスを行っている。電子ジャーナルについても同様のサービスをおこなえるのかについては疑問が残る。ここでは所蔵の登録を含めて電子ジャーナルの相互利用について考える。

3.1 電子ジャーナルの書誌について

M. K. バックランドはその著書の中で、書誌的アクセスに関する主要な事項として下記の３点を挙げている。

①文献を識別すること

②文献の所在を知ること

③文献を実際に手にして利用すること

利用者の目的は③へと到達することであり、その目的を達成のために図書館は自館の OPAC や NACSIS-CAT 等に所蔵を登録している。こうした点から考えると電子ジャーナルを NACSIS-CAT 等に登録しておくことは重要な意味を持つと思われる。

では NACSIS-CAT に登録する場合、どの様にするかを検討してみたい。OCLC では PUB TYPE: Macine-readable data、NOTE: Mode of access: World Wide Web として、ACCESS:にリンク先を表示するパターンが存在する。タイトル等の情報以外に必要となるのは、電子ジャーナルの書誌であることの明示及びそのアクセス先であると考える。これを NACSIS-CAT について行うとすると、GMD に「w（機械可読データファイル）」を、さらに NOTE に例えば「Mode of access: World Wide Web : http://xxx.xxx.xxx」といった形で表記しておけば対応できるのではなかろうか。また、こうした記述の方法が可能であれば、新 CAT 対応のクライアントで NOTE フィールドに URL の記載があればリンク作成を可能とする様な仕組みも作ることができると思われる。

3.2 電子ジャーナルの所蔵登録について

電子ジャーナルの所蔵登録については、下記の２点が問題点として挙げられる。

①所蔵登録をする必要性

所蔵登録を行うことは、１次資料への道しるべとして非常に重要な意味を持つ。ＩＬＬサービスを行ううえでも所蔵登録が不可欠なものと考える。ただ１つ懸念されるのは、出版社がそうしたサービスを許可するのか、という問題である。これについては 3.3 で検討する。

有料のものは購入しているということから所蔵している、ととらえることができるであろう。必要に応じ所蔵登録をしても問題ないと考える。

なお、無料で提供されるものはどうするのか。2.5 で分類したが無料公開のもの

と冊子体購読者に対して無料のものが存在する。無料公開のものは、WWW を使用できる環境にあるコンピュータがあれば誰でもアクセスすることができる。これでは所蔵しているとはいえないので、所蔵登録の必要はないと考える。NACSIS-CAT では書誌：所蔵＝1：n(ただし n≧１)の関係が前提となっている。この前提を曲げて所蔵を付けずに書誌の登録を行う必要があるのかは疑問の残るところである。次に冊子体購読者に対して無料のものを登録するという場合を考えてみる。この場合、全文へのアクセスには制限が加えられているので、所蔵しているといえる思われる。ただし、この場合は冊子体に付随した形で電子ジャーナルが存在している。相互利用という側面から考えると冊子体の所蔵が付けられていれば、文献複写の依頼は可能であるから、必ずしも書誌、所蔵の登録が必要となるのかは自分の中で結論が出ていない。

②所蔵登録の方法

電子ジャーナルの契約が、2.6 で述べたとおり契約期間中のアクセス権を保証するものだと考えた場合、現在のような所蔵巻次と所蔵年次による所蔵の表現方法が使用できるのか。冊子体の所蔵と同様に全文へのアクセスが可能となった時点で所蔵を更新していくという方法がまず考えられる。この方法では定期的にデータがアップデートされたかどうか確認する必要があり、雑誌目録担当者にとって煩雑となる感は否めない。

次にこれについては年間予定巻号が明示されたものであれば、それを使用し、過去のものについては使用許諾の得られたバックファイルについて記入する、という方法も考えられる。ただしこの場合は出版されていないものまで所蔵しているかの様なデータが出来上がり具合が悪い。

また、所蔵巻次は記入せず、アクセス可能な年版のみを記入しておくという方法もあるのではないだろうか。

3.3 電子ジャーナルの複写サービスについて

電子ジャーナルにおいても冊子体と同様の図書館間の複写サービスが行えるのか。Elsevier Science 社の Karen Hunter 氏は、図書館間の相互貸借について、相互貸借の名目で契約をしていない図書館等からアクセスすることについては問題があるが、相互貸借用にハードコピーをとることについては妥協点が見いだせるとの見解を示している。

また、Academic Press 社は、ドキュメントデリバリーや相互貸借について制限を付けている。さらに同社は、契約を締結した協会や企業から正式に許可を得た者だけが全文を読むことができるとしている。細かい話になるが、例えば利用者用端末が館内に設置してあり、そこから学外から来た利用者がアクセスした場合にどう取り扱うべきなのか、ということも想定できる。

UMI 社から提供される PQD(ProQuest Direct)では、ドキュメントデリバリー上の著作権問題が解決済みとなっているとのことである。文献のダウンロードやプリントアウト、FAX 送信までも可能であるとのことである。

電子ジャーナルの契約を行う際には、こうした点も明文化した契約書が取り交わされるものと思われる。

４．おわりに

今回電子ジャーナルをテーマにレポートを作成したが、考えれば考える程自分の頭の中が混乱していった様な気がしている。日頃の勉強不足がたたってしまった。ただ、集中してこうしたテーマについて考える機会を持てたことは、自分にとって非常に有益であった。

電子ジャーナルについても今後さらに新しいサービスが提供されたり、新しい技術が開発されることと思う。今後もその動向に注目し、どう対応していくか考えることを忘れずにいたいと思う。

参考文献

１．ACCESS NEWS　Q&A　～学術雑誌を取り巻く電子化の状況～　(1997)

２．中川真紀，大原寿人「オンラインジャーナルの利用と問題」(「情報の科学と技術」Vol.47(2), p.81-85　1997)

３．「オンラインジャーナル入門」(「KINOKUNIYA ACCESS NEWS」　Vol.4(9)-Vol.5(12)

４．About IDEAL　http://www.academicpress.com/www/ap/aboutid-jp.htm

５．梅田和江「最新のオンラインジャーナルの動向と今後」(「オンライン検索」Vol.18(1/2)　p.16-30　1997)

６．M. K. バックランド著　『図書館サービスの再構築』　(勁草書房　1994)

７．Karen Hunter　Things That Keep Me Awake At Night.　*Against the Grain* Vol.9(1), p.40-42 (1997)

８．山下幸侍「インターネットで全文入手：ProQuest Direct」(「薬学図書館」Vol.43(2) p.166-173　1998)